# まえよりやさしく
# なれたかもしれない

tsugumin

# 「こんとあき」がくれたもの

　子どもが産まれたら、健康に育てるだけでなく、かしこく育てなければいけない。多くの親は、健康にさえ育ってくれたらと願い、そのくせ、近い将来子供の成績に嘆く。それは理不尽というものだ。 それなら最初から子どもがかしこく育つようにと願っておかなければならない。
　そんな話を聞いたのは、まだ子どもの性別すら定かではない頃。わずかな期待と大きな不安の中、一生懸命にお腹のわが子がかしこく育ちますようにと願ったのは、一人の人間を世に送り出すことに失敗してはいけないという焦りだったのだろう。
　生まれたての娘に最初に与えた絵本は、赤ちゃんでも目で追うことができると記してあった育児本の受け売り。それからもたくさんの絵本を手に入れては、一緒に寝転んでページをめくってやっていた。わたしがつまらないと思っても、子どもをかしこくするためにがんばらなければ、それが毎日の自分の仕事であるかのように続けていた。

　お座りができるようになった娘は、自分で絵本を支えることができるようになった。これからは、娘自身が好きな絵本を飽きるまで眺めればいい。わたしは今まで満足に読めなかった料理本や小説を、娘の横で好きなだけ読めるのだ。これこそが求めていた親子の風景ではないか。わたしは心底ほっとした。
　ところが、そうはいかなかった。娘は自分の絵本を放り出し、私の本を一緒に眺めはじめた。よだれだらけの指で次々とページをめくった。 わたしは仕方なく雑誌のレシピや記事を声に出して読んだ。せっかく読んでいるものを中断されたくなかっただけだったのだが、娘は飽きるでもなくわたしの口元を見ておとなしく聞き入っていた。娘は絵本を眺めたかったのではなく、読んでもらいたかったのか。わたしはその事に唐突に気が付いた。確かにわたしの買い与えた絵本は赤ちゃん向けの文字の殆どないもので、描かれている絵に対し、わたしが「おおきいねぇ」「うわーふわふわとんでいったね」、などと勝手なコメントをはさんでページをめくっていた。そうでもしないと間がもたないからだったけど、娘はコメント込みで楽しんでいたのかもしれない。
　絵本には対象年齢が書かれていて、わたしもまんまとその縛りにはまっていた1人だった。読み聞かせでいいのなら、聞いて楽しい物語がいいに決まっている。 そういう視線で探し始めると、絵本の世界にはものすごくたくさんの名作があることが分かった。そうして、娘の教育によさそうな絵本という視点から、わたしの気に入った絵本にシフトしてからの読み聞かせは、ストレスも減り特段に楽しくなった。

　そんな中、出会うべくして出会った絵本が、林明子さんの「こんとあき」だった。 最初はかわいらしい絵に惹かれて手に取ったものの、物語の途中から、悲しい話という訳でもないのに、わたしは涙をこらえるのに必死だった。主人公のこんとあきを、わたしは自分の娘ではなく、幼い自分自身に置き換えてしまったのだ。雑踏の中、母とはぐれてしまった時のこと、習い事の帰り道で寄り道をしたことがばれた時のこと、そして田舎の祖母の家の風景……。 絵本の中の出来

事は、今まで所詮絵本の中の出来事に過ぎなかった。でも「こんとあき」はそうではなかった。主人公達と同じ体験をした訳でもないのに、わくわくするような冒険心や、幼いころの心細い気持ちが一気に溢れ出た。わたしはそのことに驚き、たじろいだ。すっかり忘れてしまった筈の子どもの頃の自分自身の感情に、もう一度向き合うことなど想像すらしていなかったのだ。

　子どもを産んでお母さんになったら、お母さんという大人の立場で子どもをなだめ、導き、そうして教育していくものだと思っていた。でも、そうではなく、自分自身が子どもの頃に感じた事を生かしながらともに成長するのもアリなのではないか。 娘はどんな反応をするだろう。わたしは娘にこの絵本を読み聞かせる自分を想像して、なんだかわくわくした。こんな感情は初めてのことだった。

　もちろん「こんとあき」は娘のお気に入りとなった。林明子さんの絵本はそれからも増え、他の絵本もどんどん増えた。登場人物ごとに声色を変え、感情たっぷりに読み聞かせる時間がわたしはいつしか好きになっていた。そしていつの間にか、かしこく育てるためではなく、今の楽しい気持ちや感じたことを大人になっても忘れないでいてほしいという気持ちで、子育てそのものを積み重ねていったと思う。

　娘が成人した今でも、「絵本は絶対捨てないで」と言われ、多くの蔵書が未だに本棚を占領しているが、時折なつかしく手に取って読み返すたび、幼かった娘の姿をも一緒に思い出す。あの本に出会ったことで、わたしの人生は、前より少しだけやさしくなれた気がする。